

ささやかな、インド研修 報告書

令和 元年 7月 11日

岡山県議会議員 波多 洋治 ⑩

視察の概要は次の通りでした。

- 1, 目的
 - ①インド・ムンバイ市の歴史・政治・経済の視察
 - ②インド・ムンバイ市の空手道の指導と普及活動
 - ③インド・ムンバイ市のエレファンタ島石窟群視察
- 2, 視察場所 インド・ムンバイ市
- 3, 視察期間 令和元年7月5日～令和元年7月10日

報告事項

①インド・ムンバイ市の歴史・政治・経済の視察

(1)国名のインドは、インダス川流域に移住したアーリア人が、この地域をシンドと呼んだが、ペルシア語ではヒンドゥーと発音され、これがギリシア語でインドスと呼ばれたことに由来します。

(2)国旗はサフラン色(オレンジ)、白、緑の横3色旗。サフラン色は勇気と犠牲、白は真理と平和、緑は公正と騎士道を表す。中央には、アショーカ王の第3回仏典結集記念碑からとったチャクラ(法の輪)を青で配置する。1947年制定。

(3)国歌は、「すべての人民の心の支配者。」詩聖R.タゴールの1912年の詩に曲をつけたもの。1948年8月14日の憲法制定会議で歌われ、50年1月正式採択。インドの旋律ラーガに基づく2分の2拍子。編曲はH.ムリル。

(4)インド亜大陸のガンジス川流域から半島全体を占め、

ヒマラヤ山岳地帯、ヒンドスタン平原、タール砂漠、デカン高原の四地域に区分される。その他に、アンダマン諸島、ニコバル諸島、ラッカディブ諸島がある。面積は日本の8.7倍。

(5)政体は連邦共和制で、元首は任期5年の大統領。議会は二院制で、上院(任期6年)と下院(任期5年)からなる。

(6)下院の構成 下院は憲法の定めでは「人民院」といわれるが、一般にはローク=サバと呼ばれている。下院議員は、現在545名である。その内訳は州選出議員が530名、連邦直轄地選出議員が13名、大統領指名のアングロ=インディアン(父又は父方の祖先がヨーロッパ人であるインド人で、インドに生まれ、かつ、インドに居住するものをいう)議員2名である。下院議員の選出には、他国にあまり例のないユニークな留保議会制が設けられている。これは長年に亘り虐げられてきた指定カースト(不可触賤民)と指定部族に対して議席を留保するものである。配分議席は、指定カーストに79議席、指定部族に40議席となっている。

(7)下院の選挙 下院の被選挙資格は25歳以上で、選挙権は18歳以上である。どの州からでも、しかも複数の選挙区からでも同時に立候補できる。これはインドにおける国民統合の促進をねらって導入された制度である。下院の任期は解散がなければ5年である。

(8)モンスーンの影響を受けるベンガル湾沿岸の海岸平野やガンジス川下流域では稲、北西部のパンジャブ地方では小麦、デカン高原では綿花の栽培が盛ん。1970年代末に

は一応の食糧自給を達成したと言われながら、海外から流入することもある。古くから繊維工業が盛んであるが、近年では鉄鋼、機械、化学肥料など重工業の発展に力を注いでいる。

(9)ムンバイの都市としての歴史は、1534年にポルトガルがグジャラートの土族からこの地域を譲り受けたことに始まる。ポルトガル人はこの地に、ゴアの補助港としての城塞都市を築き、ここを「ボンベイ」と呼んだ。この名は、ポルトガル語のボン・バイア(良港)に由来すると言われるが、それ以前からこの地の呼称として使用されていた「ムンバイ」という名は、当時漁民の信仰を集めていたシヴァ神妃パールヴァティの異名、ムンバによるとの説がある。当時は北からバレル、マヒーム、ウォルリ、マザガオン、ボンベイ、小コラバ、コラバの7つの島から成っていた。

(10)1661年、ポルトガルのカタリナ王女がイギリスのチャールズ二世と結婚する際、ボンベイは持参金としてイギリス側に委譲された。1668年、英国王家はこれを10ポンドでイギリス東インド会社に貸し付けた。18世紀末にはインド最大の造船業を持つようになり、ボンベイはインドの西海岸における海運や貿易の要衝となっていた。こうしてボンベイが重要性を増すに連れて、少しずつ島の間の埋め立てが行なわれ、市街地として発展、1845年、ヴェラードの計画した大規模な干拓が行なわれ、これによってムンバイの7つの島は完全に大陸の一部に成った。

(11)20世紀、2度の世界大戦を通じてボンベイはカルカッ

タを抜く商工業都市となり、1947年のインド独立後もボンベイ州の州都として発展を続けた。その後、インド政府が言語ごとに州を再編する、いわゆる言語州の政策が打ち出され、ボンベイ州は北部のグジャラート州、南部はマハラシュトラ州に分割され、ボンベイは後者の州となった。1995年、ボンベイ市議会の議決により、英語での正式名称がボンベイからムンバイと正式に変更された。

(12)ムンバイの概要

- 面積: 437.71km²(横浜市とほぼ同じ。横浜市と姉妹都市締結)
- 人口: 約2,100万人(2011年)
- 気候: 典型的な熱帯モンスーン気候(雨期と乾期)
- 地理: アラビア海に臨むインドの西海岸
- 日本との時間差: - 3時間30分

(13)ムンバイの経済 インドの最大都市ムンバイは、国内経済の中心都市として重要拠点となっている。2011年3月英国のシンクタンクにより、世界第58位の金融センターと評価されている。

(14)ムンバイは、国全体の全工場雇用者数の40%、全所得税収入の40%、関税収入の60%を計上する。中心市街地には、インド準備銀行、ボンベイ証券取引所、インド国立証券取引所、インド造幣局といった国内の金融機関を初め、多くの大企業の本社、多国籍企業の拠点が置かれている。

(15)娯楽産業もムンバイの重要な産業の一つである。ほとんどの国内主要テレビ局や衛生ネット局、出版社はムンバイに本社を置いている。インド映画業界のうち、国内最大

のヒンディー語娯楽映画産業の中心地でもあり、ハリウッドをもじって「ボリウッド」として、現在世界的に知られている。

②インド・ムンバイ市の空手道の指導と普及活動

(1)フロッツ・パターン君との出会い 2012.4 スリランカ・コロンボに空手道の指導に赴いたとき、インドから一人の青年が参加、その時、「インドにも是非」という要請を受けていた。その約束を果たすために、ムンバイ市を訪問した。一般的には、旅費・宿泊費プラス何かの謝礼は、空手道発祥の地・日本から指導者を招く場合は当然事ではありますが、スリランカといい、インドといい、とても貧しい国であります。空手道を指導している指導者も、学んでいる子ども達も、真面目で、一生懸命ですが、貧しいことには変わりがありません。従って、過去たくさんの日本人指導者達が、その要請を受けて、現地に赴いています。しかしながら、その待遇は芳しくありません。そのため、多くの日本人指導者達が、途中で指導を投げ出して帰国してしまいます。残された現地の空手道を学びたいと思っている人達は、どうなりますか。見様見まねの空手道になってしまいます。わずか21拳動の基本形である「平安初段」は、実に8箇所もの間違いがあります。1万回の練習を繰り返しても、間違っているものは間違っているのです。

今回のセミナーの参加者は400名でした。どの子も一生懸命です。しかし、よく見ると、裸足の子もいます。道

衣の買えない子もいます。審査をすれば審査料が払えないと言って、折角の黒帯を拒否されます。かつての日本人指導者は、ここで手抜きをして、帰国するのです。それ故に、このアジアという地域に、空手道発祥の地・日本がありながら、日本を除くアジアは、世界の空手界から後れを取ってしまいました。世界の空手人口は今や、1億人と言われています。既にヨーロッパではメジャースポーツにのしあがりました。それは、ヨーロッパの人達の、日本人指導者に対する待遇が格段の差があるからです。わたしのように、異国の地まで足を運び、身銭を切ってまで指導する日本人はほとんどいません。今回の私の旅も、自腹です。私は、昨年のスリランカの例もあり、覚悟の上の訪問でしたから、いささかの不満ありません。しかし、敢て、今後のアジア地域の空手界の発展のために、苦言を呈して帰ってまいりました。

(2)セミナー期間中、近隣の学校の理事長・校長などたくさんの方が、花束をもって、小生への表敬に訪れた。そして、セミナー後に、9年生学校(日本の小学校・中学校が統合されているような学校)からのお誘いを受け、学校訪問と相成った。朝8時半、学校に到着すると、1500名の児童生徒がグラウンドに整列し、正門から壇上までの間、空手道の弟子達(この学校からは80名の児童生徒が空手道を習っている)が、粛々と誘導した。小生は、世界の空手界の実情、空手道の目指すもの、について15分間(ヒンディー語の通訳)話をさせて戴いた。歓迎式典の後、理事長・校長

との懇談の中で、「空手を学んでいる人は、校内で輝いています」の話しをお伺いして感動した。まさしく指導者パターン君の力により、空手道の目指すものの実践が為されている姿を見た。厳しい身分制度の中で、富めるものと貧しきもの、近代と後発の混迷の中で、次代を担うインドの子ども達が、空手道を通して、日本のサムライ魂を学び、立派な社会人、立派な指導者に成長するであろうという、大いなる期待感をもって、学校を後にした。ちなみに、懇談会の中で、理事長と学校長から、共に6月から全校児童生徒に空手道を学ばせる、との言葉を戴き、感銘した。

③インド・ムンバイ市のエレファンタ島石窟群視察

(1)インド門：前世紀初頭、元イギリス国王ジョージ五世王がインドを訪問したことを記念して立てられたインド門は、他の多くの植民地の遺物と同様に、都市の力強さと堅固さの象徴として、独立したインドによって採用されました。南ムンバイの港の丁度前に位置しております。ここから多数のフェリーが出航していて、賑わっています。

(2)エレファンタ石窟群：インド門裏から船で約1時間で、かつてガーラプリー島と呼ばれていた小さな島に着きます。この小島に、16世紀にポルトガル人が上陸し、巨大な石像のゾウを発見、以来エレファンタ島と呼ばれています。この島には、7窟のヒンドゥー教の石窟寺院に、岩山を一刀彫で刻んだ、素晴らしい彫刻が残されています。ムンバイ観光の最大の見どころであり、1987年に世界遺産登録されております。石窟は、6～8世紀の作とされ、すべ

てシヴァ神を祀ったものです。多くが、ポルトガル人の破壊の対象とされ、彼らは陸上から、また海上から、銃や大砲の試し撃ちにされ、破壊されています。首のない石像や手足をもぎ取られた石像に変わり果てたのです。ただ一箇所、高さ200mの岩山の頂上付近にある第一窟には、シヴァの神話世界が表現されています。それとて決して完全な姿ではありません。この第一窟は、高さ6m、広さ約40m四方の空間が20本ほどの石柱に支えられています。その一番奥には、シヴァの三面上半身像があり、他にも様々な姿や表情をしたシヴァやヒンドゥーの神々の彫刻がありますが、どれ一つとして完全なものはありません。古代民族の優れた芸術性、感性の高い文化遺産の存在を許さなかったヨーロッパ人の優越感と残虐性に、憤りと悲しみをもって視察いたしました。

追伸: お土産を買う間もなく、結構ハードスケジュールの日程の中で、実はホテルの外に一步も出れないような状況になりました。雨期(熱帯モンスーン)独特の激しい雨が降り続いたからです。空港に繋がる2本の国道は封鎖されてしまいました。しばらく雨が上がると、街はたちどころに人が集まり、雨が降ると、どこに消えるのか殆どの人がいなくなります。歩道は歩道にあらず、舗道もされず、普通の乗用車や三輪タクシーが水たまりをはねながら、縫うように立てに横に交差しながら走ります。インドはいまだ近代都市の形成までには、相当数の年月と費用が必要です。道路付近にたむろする人達は、不平不満を言うのでもなく、それが日常の当たり前の風景として受け入れています。インドは、これからどのように変わるのだろうか。 {令和元年7月11日・十一クラブ7月例会に記す}